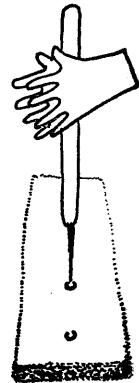


## まわるものへの関心



## 津 守 真

秋になってから、とくによく私がつき合うようになった四才の男児Tは、まわるものが好きである。固執すると云った方がよいくらいであるが、この語を用いると、見方が固定してしまうので、私にはこの語を避けたい気持がある。毎朝、台所からはずした大きな換気扇や、玩具の小さなプロペラなどを、母親と共に手に持ってあらわれた。家には、玩具の車、車輪、ぼたんなどが、たくさん箱の中にためてある。近所のパチンコ屋から古い機械をもらってきて家に置いてあるとのことである。

Tは母親から離れず、私はプロペラの羽根や車輪などを媒介として一緒に遊ぶように試みていたが、不満に低く呻っていて、何を要求しているのかわからないことがしばしばあった。何週間かたつうちに、部屋の中を私と一緒にぐるぐると円形に走りまわり、ピアノで伴奏をひくと、走りまわりながら笑うようになった。

自閉症の子どもは、まわる物を好むと云われる。この子どもは、自閉症と診断されるだろうが、保育にとって、診断名にかかわらず、どの子どもにも、自己実現の

道を開くことが最大の課題である。まわる物に関心を持つ子どもには、まず、その関心を否定せず、そこから出発するのがよいと私には思えた。まわる運動は、反復、スピード、軸を中心とした回転などがその要素になっている。この子どもは、そのいずれも好きであることが次第に判明する。

まわるものを好むのは、この子どもだけではなく、多くの子どもに普通にみられる。お祭りの風車は魅力的である。色とりどりの風車がなかったら、お祭りの賑やかな気分は出てこない。私の娘が二才のころ、縁日で求めた風車を庭の真中に立てて、じっとみつめて動かなかったことがあった。こまも、自分の手でまわせない年令から、何十回も、まわすことをせがまれた。風車にも、子どもの玩具としての歴史と、おとなの呪術的信仰の対象としての歴史との両者がある。いずれもが示すことは、古い時代から、まわるものは子どもをも大人をも魅きつけてきたということである。現代でも同様であって、遊園地は、スピードの、あるいはゆるやかな動きの回転動

力に満ちている。

### まわるものをみつめる心

ある対象をみつめるのは、そのものと同種の要素が、人間の側にすでにあるからであろう。そのものをみつめることにより、対象と同種の動きが心の中に生ずる。まわるものをみつめているとき、見る人の心は、同じように回転しているであろう。すなわち、中心をめぐるて反復運動をなし、スピードが増すにつれて、精神は高揚し、興奮する。

四才のTは、その生育の歴史の中でも、心が解き放たれて精神が高揚する体験をしたことがないように思われる。生育歴の中にその事実をせんさくするまでもなく、その表情や身体の動きから、容易に察せられる。回転の動きをみつめることによって、あるいは、自らが回転の動作をすることによって、その瞬間には、まわりつく束縛から解放され、精神の高揚を感じるのではないか。

回転する空間をつくり出したとき、それは世界の他の

部分から切り離された、それ自体で充足された空間となりやすい。それ故に、それは聖なる空間ともなるし、異常な空間ともなりやすい。

本田和子は回転についての考察の中で、『子どもたちのいる宇宙』三省堂選書77、P87）太平記に、こまで遊んでいて物狂いした少年の記事に言及し、その子どもは『俄に物に狂て、二三丈飛上々々、跳る事三日三夜也』

と云う文章を引用している。そのことを本田は、「騷擾の時代の不気味な地鳴りの中で、人々の視線は、凶兆を見るのに敏であった」と述べている。私には、ここに引用された太平記の少年と全く同じ現象が、現代の私共の周囲にあらわれているように思えて、興味深く、またおそろしい。機械化と都市化が育児環境の内部にまで浸入し、高層住宅の中で土にふれたこともなく幼児期を過ごし、幼稚園に入園するや、幼児は管理社会にとりかまされる。「心は静かに中から働いてくるべき」（倉橋惣三、『育ての心』フレーベル新書B下、P75）であるのに、幼い子どもが、自分から発動して事をすることを許され

ない。幼児期からの障害の発生は、現代の風潮と無関係ではない。

### 幼稚園の観察から

このような問題ととり組んでいるとき、私は区立のK幼稚園を観察する機会があった。砂場で、数人の子どもが、スクーターをさかさまにして埋め、車輪を手で回しているのが直ちに目に映った。まわる物に関心をもつのは、私が担当している子どもだけではないことに気付かされて、私は砂場の遊びを見続けた。その子どもたちは、車輪を回しながら、スクーターの上に砂をつみ、車がまわっても砂山がくずれないように手でかためた。それから、車輪の下に溝を掘り、水を流し、他の一群の子どもたちの溝へとつなげた。この子どもたちは、回転運動だけを見つめるのではなく、それに砂と水の素材を加え、積んだり掘ったりする活動を同時に行っていた。つまり、世界の他の部分との調和のある関連のもとで、まわる物を知覚している。

この観察をした後、養護学校でTと出会ったとき、私は、プロペラを片手に持って車を動かすTの傍に、砂をいれた容器と水とを用意した。まだTはそれで遊んだと云えないが、ちらと見てから、積木で斜面を作り、車をころがした。その午後、私はTと砂場にはいることに成功した。Tはバケツの水の中に車をいれ、その上から砂をひとつかみ落した。まわるものに砂と水の素材を加えることによって、Tの関心は一段階ひろがった。

### 斜面をころがす

それから数週間、Tは、つみきやレールその他で斜面をつくり、電車や自動車を斜面の上方において手をはなすということを楽しんでいた。

丁度その間に、私は三重県の二つの幼稚園を参観する機会があった。S幼稚園では、五人の男児が、車輪にボディを作った自動車をもって、コンクリートの傾斜面を走らせていた。子どもたちは互いに大声でしゃべり会いながらしばらく斜面に車を走らせ、それから車を手にも

って走りまわっていた。もうひとつのM幼稚園でも、同様にボディを原紙で作った自動車を、子どもの背丈ほどに積木をつんで作った斜面に走らせていた。その子どもたちは、それから、厚紙に赤、黄、緑の円をかいて信号機をいくつも作り、それをどこにおくかで云い合いが起った。信号機は、車の動きをコントロールする機能を果たす。この子どもたちは、車をころがして走らせることに関心を持つと共に、その動きを自らの手でコントロールする仕方をしている。際限なく回転を継続させようとする衝動のみでなく、それを自制する精神力が、子どもの遊びの中にあられる。おとなになって自己拡張の欲望がもっと大きくなったとき、それを自制するのにはもっと困難が伴う。子どもの遊びは、このような点からも、人間の精神の原型である。

Tが斜面に車をころがすのは、ようやく芽生えた自発活動である。

## Tが遊びはじめる

十一月の末の一日、午前中F先生と一緒にいたTは、箱つみきを二本、自分の体の両側に立て、その間にうづくまり、それから両手で積木を外方に押し倒して立ち上り、笑った。頭の上には自動車の絵本すらのせてあった。先生たちは、桃太郎の誕生のようだと言った。この遊びを何回もくり返した。

その日の午後、Tは私と庭に出て、しばらく初冬の陽射しをたのしんでから、手に持っていたプロペラを私に渡し、赤い電車の上にまたがって、庭を動きまわった。

それから、婦人用のサンダルを片方見つけて、それをはいて歩いたり、放り投げたり、それにまたがって歩いたりした。

Tの現実の生活には、はらいのけることのできない束縛が多くあるのだろう。現実には破ることのできない殻も、つみきであれば、こわすことができる。現実の母親は、簡単には操れないが、母親のシンボルである銀色の

サンダルならば、自分の力で自由にできる。これが遊びである。Tはいまや遊びはじめた。

遊ぶこと、すなわち、自己を実現することにまでもってゆくことが保育である。Tのこの場合のように、長期にわたってみるとその過程が明瞭になるが、一日の中では変化は目立たない。けれども、少しずつの毎日の積み重ねの中で、子どもの内側に、自己を実現する過程が進行している。目立たないその時期を先に過す保育者の力は大い。それを具体的に明かにすることは実践研究の課題である。

自閉的行動と云われるものは、固定したものではない。どんな子どもも、保育によって、その子どもなりの自己実現の活動へと導びくことができる。どんな子どもも、遊ぶことができるようになる。そのときに、自閉的行動は、もはや自閉とは云えなくなる。

私は、いま、毎日、このような子どもたちの姿を身近に見ている。  
(愛育養護学校)